



『近年の技術革新に思うこと』



池上通信機株式会社 取締役 駒野目 裕久

技術の流行り言葉として少し前まで「クラウド」、「ビックデータ」といった言葉がメディアをにぎわしていましたが、最近は「AI」、「IoT」、「VR」等へと変わり、急速な技術革新を感じています。これら「ICT: Information and Communication Technology」を中心とした技術革新は、かつて無いほど生活の利便性を向上しました。それに対し、受け側の人間は技術を適切に使っているのか、いや、逆に使われているのではないかと最近考えています。年をとり若者についていけない僻みかも知れませんが、近年の急速な技術革新について、家庭の情報通信機器の代表格であるテレビ、パーソナルコンピュータ、電話の変遷を振り返りながら、個人的に感じていることを述べさせていただきます。

テレビは、昭和28年（1953年）にNHKがテレビ放送を開始後、東京オリンピックが開催された昭和39年（1964年）には世帯普及率90%に達し、家庭の情報機器の中心的存在となりました。さらに、一日の平均テレビ視聴時間が3時間に至り、人々の情報収集、娯楽、生活も、テレビ中心のスタイルへと変わっていきました。

当時、テレビの普及に伴い人々の活字離れが問題視され、ジャーナリスト・大宅壮一が、テレビにより想像力や思考力、表現力等の低下を招くとして、「一億白痴化運動が展開されている」と警鐘を鳴らしたことを記憶されている方も多いと思います。

現在、テレビは地上デジタル放送によるハイビジョンとなり、2020年の東京オリンピックに向か、4K、8Kへと更なる高精細化と表現力の向上の技術開発が進められています。さらに、インターネットへの接続により、Netflixやhuluを始めとするネット映像配信サービスやハイブリットキャストによる新たな放送サービスなどを加えることで、家庭における情報機器の中核を維持しようとしています。

パーソナルコンピュータ（パソコン）が、一般家庭に入りだしたのは1980年代後半ごろと記憶しています。当時の利用はワープロと年賀状作成、そしてゲームが主であったのではないでしょうか。情報通信機器としての利用は一部のマニアの間で流行っていたパソコン通信であったように思います。

1990年代に入りインターネットの商用化とともに、パソコンはインターネット端末として活用が始まります。インターネットは、それまで大学、企業の研究機関が学術的なコミュニケーションに活用していましたが、そこにパソコン通信がなだれ込み、メールや掲示板などのマナーの違いによりコミュニケーションが混乱、今風に言えば「ネット炎上」が頻繁に発生していたことを記憶しています。

インターネット（以後ネット）の商用化は、Amazon等のネット通販、YouTubeを始めとする動画配信など様々な新しいサービスを生み、簡単にサービスを利用出来ることから爆発的に利用者が増えました。また、検索機能の高度化は、ネット検索を日常的なものにして、今では生活の中に浸透しています。しかし、この利便性は大学生がレポート作成の際に、ネット上のコンテンツをコピー＆ペーストして利用することが横行して問題とな

り、ついには論文の捏造事件にまでも発展し、社会問題になったことは記憶に新しいところです。

電話については、1995年以降の急速に普及した携帯電話により、それまで家庭に1台であった時代から個人持ちの時代へと変わりました。さらに、1999年には「iモード」を始めとするインターネット接続と電子メールが開始され、カメラの搭載、表示画面の高解像度化など、多機能なコミュニケーション端末機へと変貌してきました。しかし、車の運転中の使用による交通事故が社会問題となり、電車内の通話の禁止、学校への持ち込み禁止など、利用マナーの問題が叫ばれたことを記憶されている方も多いと思います。

この携帯電話も2007年のiPhoneの登場をきっかけに、爆発的な勢いで多機能なスマートフォンへと変わりつつあります。総務省の情報通信白書（29年版）によれば、2016年度でスマートフォンの世帯保有率は72%に達しています。

スマートフォンの登場は、今までパソコンで行っていたネット利用を、どこでも簡単に使える利便性を提供し、さらに、Twitter、Facebook、LINE等のSNSを急速に広げました。東日本大震災では安否確認や災害情報等の有効な情報伝達ツールとして、一躍注目をあびたことは記憶に新しいところです。しかし、その反面、災害が発生する毎に、SNSによる「デマ」や「非難」は大きな社会問題となり、しばしばメディアに取り上げられていることは皆さんもご存知のことだと思います。

このように家庭の情報通信機器を中心とした技術革新を振り返ってみると、インターネットが生活の中に浸透し、かつて無いほど暮らしの利便性を向上していることがわかります。しかし、その反面、社会的問題も引き起こしています。これらは、技術を使う側の問題に起因しますが、利便性にのみ目が向き、問題行動と認識せずに行っていることが大きな問題として捉えられます。昨今、「倫理」、「道徳」が叫ばれているのは、このような背景もあると思います。

さて、近年の技術革新は、「人を幸せにしているのか」、または、「賢くしているのか」、と考えた時、一抹の不安を感じます。かつて、電卓やワープロが、人々の計算能力や漢字筆記能力の低下を招いたように、技術の進展は人の能力を退化させる面があります。

インターネットが家庭の情報通信機器に繋がり、かつてないほど利便性は向上しました。しかし、ネット上に溢れる様々な情報やSNSのリアルタイム情報は、人類がかつて経験したことがないほど、日々、多量の情報にさらされる結果となっています。

一般に人は、情報過多の状況に置かれると思考が停止し判断力が低下すると言われています。まさに、スマートフォンの爆発的な普及は、休み無く人々を情報の渦の中に巻き込み、思考能力を停止させているかと思います。次に来る「AI」の技術が解決を図るかもしれません、往々にして「AI」に丸投げし、思考力の退化が加速する最悪のシナリオも考えられます。

近年の技術革新について悲観的な考え方を述べさせてもらいました。しかし、我々が「一億白痴化運動」の時代を無事生き抜いてきたのですから、楽観的に考えて、素晴らしい未来を期待したいと思います。

最後に、かつて、人の能力の拡張を目指し技術研究を進めていたパイオニア達が、下を向き、手のひらのスマートフォンでSNSやゲームに興じている現代の人々の姿を見たら、「こんな世界のために研究をしたのではない!」と言う叫びが聞こえてきそうです。